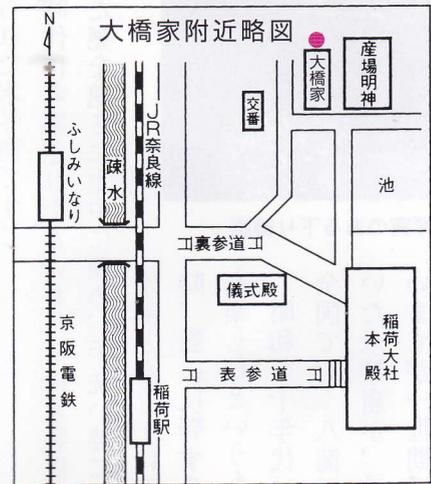


京都市 名勝  
(昭和63年 登録)

# 大橋家 庭園

たいりょうてい  
(苔涼庭)



## 大橋家 庭園 (苔涼庭)

〒612-0806 京都市伏見区深草開土町45の2

電話・FAX (075) 641-1346

## 大橋家 庭園 (苔涼庭)

伏見稲荷大社の北にある本庭園は、当家四代前の大橋仁兵衛が明治末から造園に着手し大正二年に完成した別荘の庭で、親しかった七代目・小川治兵衛(植治)氏の監修を得て趣味で集めた春日型・善導寺型など十二基の石灯笼及び伽藍石をはじめ数多くの庭石を配し座敷の造りと調和させその眺めを楽しむ露地風の庭で、又、京都最古の水琴窟を備えた庭園として特筆されるもので京都市の登録文化財となっています。

『苔涼庭』の名は、専ら淀川の舟運に頼っていた鉄道開通以前から瀬戸内の鮮魚を一手に扱う元請を家業としていた大橋仁兵衛が、親交のあった各地網元の『大漁』を祈念して名付けたと伝えられています。

本庭園で最も注目されるものは庭の一段低い下り蹲踞と座敷縁側手洗の二か所に設けられた水琴窟です。

これは江戸時代に考案されたといわれる排水装置を兼ねた音響装置で、底に穴をあけた甕を逆さに土中に埋め、手洗い時に穴から流れ込んだ水が水滴となり下に溜まった水面に落ちる時、甕に反響する深く澄んだ微妙な音を楽しむというものです。



水琴窟のある下り蹲踞

昭和五十年代には当家のものを含め全国で七、八箇所に残るのみとなっていた水琴窟が、最近又数多く造られています。一期近くその優雅な音色を響かせているものは極めて珍しいものです。

常磐灯笼よりの眺め



## 大橋家庭園（蒼涼庭）の説明

大橋家庭園は現当主の曾祖父・大橋仁兵衛が隠居屋敷（別荘）の庭として、遠戚で親しくしていた名造園家・七代目小川治兵衛の監修を得て大正2年(1913年)に完成しました。仁兵衛は瀬戸内海の鮮魚が淀川の水運により京都へ運ばれていた時代から鮮魚の元受を家業としており、『蒼涼庭』の名称は親交の深かった各地網元の『大漁』を祈願して名付けたものと伝えられています。

七代目・小川治兵衛は明治・大正時代を代表する造園家で、京都には『平安神宮の神苑』『無隣庵（山県有朋の別荘）庭園』『対龍山荘（市田家別荘）庭園』『清風荘（西園寺公望の別荘）庭園』『有芳園（住友家別荘）』等国指定の名勝を含め、この時代の名園と称されるものが数多く存在します。この時代に京都まで琵琶湖疏水が完成し、その水を滝・川・池など庭の景色として利用する庭造りが七代目・治兵衛を水の名人として有名にした造園の一つのパターンとなっています。

大橋仁兵衛は庭石・石灯籠を大変好み、小川治兵衛の協力を得て次々と入手した12基の石灯籠がすえられています。小川治兵衛は『この広さに12基の灯籠はあまりに多すぎる』と助言しましたが、仁兵衛は『私は灯籠がすきなんや』として、この助言を受けなかったということです。治兵衛が多すぎるとした灯籠も百年の歳月を経て苔で青みがかり落ち着いた風情を見せています。

庭の灯籠は常盤型・雪見・朝鮮・葛家型・春日・三重塔・善導寺・明石その他十二基で庭園の門の外に巴形の飾り燈籠が配置されています。灯籠以外の石造品としては菊花手水鉢・富士型手水鉢・三個の伽藍石があります。

この庭で特筆されるものは百年間いい音を響かせている京都最古の二箇所の水琴窟です。水琴窟は障の排水装置として地中に埋めた瓶に工夫を加え、手洗い時に涼しげな音を響かせるもので日本庭園最高の音響装置と称されています。江戸時代に考え出され大正時代までは日本各地で数多く作られた水琴窟は年月を経て瓶に泥がたまり音が出なくなり、昭和になってからは戦争や下水の普及で新しく作られることはなくなり全く忘れられた存在となってしまいました。その結果昭和50年頃には全国で音の聞こえる水琴窟は当家を含め7～8箇所となっていました。ところが、昭和58年(1983年)の朝日新聞『天声人語』の水琴窟の記事や、昭和61年(1986年)のNHK教育テレビによる水琴窟復元の放映などが水琴窟復活の契機となり、現在では京都市内だけでも30数箇所を数えるようになりました。

どうして当庭園に水琴窟を作られたかは文書がなく不明ですが、仁兵衛は雅楽が趣味で音を楽しむ水琴窟に思い至ったのか、あるいは小川治兵衛さんとの相談で琵琶湖疏水を利用した庭作りに代わるものとして水琴窟が作られたのかも知れません。【下に水琴窟断面模式図を示す】

庭園北西に設けられた『待合』は本来『茶室』を作るつもりでしたが家相鑑定の結果、仕様変更して待合にしたものです。

